

観音菩薩の宗教

10

国際教養大学特任教授 金岡秀郎

変化観音の成立と展開

観音菩薩の大きな特色は、その姿の多様性とそれに伴う種々の呼称である。観音菩薩の基本形とされるのは二面二臂、すなわち人間と同じひとつの顔と二本の腕を有する姿の聖観音であるが、それとは大きく異なる千本の腕と千の眼を持つ千手千眼観音菩薩や、十一の顔を有する十一面観音菩薩、激しい怒りの表情である忿怒形の馬頭観音のほか、多種の観音像が経文にも図像にも現れている。その多彩な尊容からは、それらが元は一尊格であるとは思えぬほどである。

こうした観音菩薩の特色は、他の尊格と比べるとわかりやすい。例えば釈迦如来は仏像が製作

された以前、法輪や仏足石といわれる足型で表現された。その後、ガンダールやマトウラーで仏像が作られるようになったが、観音像のように全く異なる姿のブツダ像が作られることはなかった。インドで作られたブツダ像は、立像・坐像・臥像などの姿勢の違いや手指の印契の相違はあっても、二臂という人体的特色を越える作例は見つかっていない。阿弥陀如来にしても釈迦如来と同様、観音菩薩のような姿のバリエーションは見出されていない。大乘仏教の時代以降の如来像は、基本的に三十二相八十種好という仏の姿の特色に従って作製され、その規則から大きく逸脱することはな

かった。こうした如来像の均質性に對し、多彩に姿を変える観音菩薩は現代の学者によって変化観音と名付けられている。変化観音が登場する以前、インドで観音菩薩は初めに二面二臂の像として作られた。こうした像が最初に作られたのはクシャーナ朝時代（二世紀中頃～三世紀中頃）のガンダールにおいてと推定され（宮地昭『仏像学入門』春秋社）、ブツダを主尊にして両脇侍に観音・弥勒の三尊形式の作例が二十点ほど見つかっている。このほか単独の像も発見されており、それらは上半身が裸形で装身具を身に付けた人間的な姿で、超人性は示されていない。こうした観音菩薩は通例、聖観音といわれている。サンスクリット文学など、インドの古典文化が隆盛を極めたグプタ朝（四世紀中頃～六世紀中頃）では、ブツダが初めて教えを説いたとされるインド北部のサー



平安期以降一般的になった四十二臂の十一面千手観音像（昭和期の作。八王子市妙薬寺蔵）

ルナートにおいて浮彫の聖観音像が作られた。この観音像は冠のように仕上げた頭髪の前部に化仏といわれる仏の姿を付け、右手を下に垂らした禪定印を示し、左手は大地から伸びる蓮華の茎を執っている。こうした図像はインドの観音像の基本形になったとされる（宮地、同書）。

八世紀ごろインドで密教が興隆すると、伝統的な聖観音像とともに、生物学的な人体の特色を超越した姿を有する変化観音が出現してきた。密教の一大特色は供養法の成立とその実践である。供

養法はサンスクリット語でブージャナーもしくはブージャーナといい、原意は「尊敬」「敬意」を表したが、密教においては特に仏菩薩や諸天や神々に華や香を捧げて礼拝する儀礼を指した。こうした供養法は当時のインドで盛んであったヒンドゥー教の儀礼から仏教に取り入れられたものと考えられている。このことによつて原始仏教時代には否定的であった呪術的・儀礼的性格が、密教においては重要な位置を占めるようになった。真言宗など、日本の密教寺院で馴染み深い薬師

法や不動法、護摩の法要は、供養法の実例である。密教の供養法において、導師は薬師如来や不動尊など種々の尊格を本尊として仰ぎ、賓客として道場に迎える。こうした供養法の主たる目的は現世利益をはじめとする祈願である。変化観音は供養の儀礼の中で重要な尊格として登場してきた。

インドにおいて仏教はヒンドゥー教と異なる宗教でありながら、大衆の信仰においては共通する基盤を持っており（佐久間留理子『観音菩薩―変幻自在な姿をとる救済者』春秋社）、仏教がヒンドゥー教の儀礼や信仰を取り入れることに大きな障壁はなかった。こうしたなか、観音菩薩は「仏教とヒンドゥー教との間の関係を融和的に取り持つ」（佐久間、前掲書）役割を果たしていた。すなわち、本来は慈悲の菩薩であった観音菩薩にヒンドゥー教的な神の性格が加わり、変化観音と

なったのである。変化観音がヴィシシュヌ神のヴァターラ（権化）に類似しているのは、ヒンドゥー神の図像学的特徴の一部が「転移」すなわち「取り込まれた」からと推定されている（佐久間、前掲書）。『観音経』の説く観音の化身と異なり、変化観音は観音菩薩それ自身の姿であるという特色を持っている。

インドのみならず中国で成立した白衣観音・楊柳観音・魚籃観音・龍頭観音などを含めると、変化観音には多くの種類が認められるが、ここではヒンドゥー教の神々の図像学的特徴を有すると思われる十一面観音と千手観音を見てみよう。十一面観音はインド初期密教において「十一面（エーカーダシヤ・ムカ）」という名の心呪（呪文）が成立した後に出現したと推定されている（佐久間、前掲書）。十一面は四方・四維と上下の十方および本来の顔を合わ

せたもので、あらゆる方向を視ていることを表す。衆生はこの菩薩の心呪を百八回唱えたと十の果報が得られると説かれていた。多くの十二面観音は、本来の柔和な顔の頭上に十面を載せている。このうち最上段に仏面がひとつ載せられ、その下の前の三面は慈悲相（菩薩面）に、左の三面は威怒相（瞋怒面）に、右の三面は白牙が上に出る相（狗牙上出面）に、後ろの一面は暴悪大笑面という悪を笑い飛ばす相が作られる。後ろの顔は前から参拝する人には見えないが、一般の観音像を想像する人には強烈な印象を与えることが多い。

院内散歩 20

～薬王院の展示物～



木版画『紅葉が彩る願叶輪潜』作・井堂雅夫

多臂の造形に観音菩薩の救済力が結びつけられて成立したとされる（宮治昭、前掲書）。日本でも誦誦される漢訳の『千手千眼観世音菩薩広大本満無礙大悲心陀羅尼經』には、本来の二臂と背中から出る四十臂の計四十二臂が説かれ、四十臂それぞれが持物が示されている。日本では平安時代以降、四十二臂の千手観音像が圧倒的に多くなり、一本の手が二十

五世界の衆生を救うとされ、乗じて千手と理解された（田中義恭・星山晋也『目でみる仏像―観音菩薩―東京美術』）。一方、天平時代に作られた葛井寺の乾漆千手観音坐像は千一本の手と眼とともに十二面を有する国宝の秘仏で、二〇一八年に東京国立博物館で公開された大きな話題となった。この像の公式名は千手観音であるが、図像からすれば十二面千手千眼観音であり、ふたつの変化観音を併せた尊容となっている。